THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

第62号
広報委員会発行

関西大学通信

大阪府吹田市山手町3丁目
関西大学広報委員会

入学試験志願者数

学部	年度	本学試験場	地方試験場 金沢	名古屋	高松	広島	福岡	鹿児島	札幌	東京	地方計	合計	増減
第1部 法	51	7,190	95	391	230	232	211	67	35	215	1,476	8,666	△1,530
	50	8,561	108	454	251	239	257	80	50	196	1,635	10,196	
文	51	9,278	168	497	351	230	154	64	50	217	1,731	11,009	1,443
	50	8,220	123	416	258	194	157	46	34	118	1,346	9,566	
経済	51	5,190	153	379	271	185	181	85	19	63	1,336	6,526	△ 259
	50	5,521	134	366	244	156	199	85	27	53	1,264	6,785	
商	51	12,507	233	707	339	278	296	68	24	263	2,208	14,715	1,078
	50	11,865	155	511	346	259	265	69	29	138	1,772	13,637	
社会	51	11,788	218	445	385	285	316	86	42	247	2,024	13,812	739
	50	11,570	157	404	256	224	212	41	46	163	1,503	13,073	
工	51	10,381	306	966	348	291	290	149	61	129	2,540	12,921	△1,719
	50	11,944	285	938	366	334	423	121	64	165	2,696	14,640	
計	51	56,334	1,173	3,385	1,924	1,501	1,448	519	231	1,134	11,315	67,649	△ 248
	50	57,681	962	3,089	1,721	1,406	1,513	442	250	833	10,216	67,897	
第2部 法	51	1,070	8	48	19	16	23	5	4	18	141	1,211	△ 405
	50	1,452	15	53	18	14	28	19	8	9	164	1,616	
文	51	780	6	38	8	13	18	10	4	24	121	901	△ 101
	50	891	5	34	11	10	16	3	5	27	111	1,002	
経済	51	1,178	6	14	12	10	10	7	0	8	67	1,245	△ 339
	50	1,526	4	13	7	8	7	11	1	7	58	1,584	
商	51	948	6	21	6	12	10	10	1	8	74	1,022	33
	50	945	8	5	3	7	12	3	0	6	44	989	
社会	51	819	7	28	15	6	13	6	1	17	93	912	△ 11
	50	864	4	21	6	8	5	1	3	11	59	923	
計	51	4,795	33	149	60	57	74	38	10	75	496	5,291	△ 823
	50	5,678	36	126	45	47	68	37	17	60	436	6,114	
総計	51	61,129	1,206	3,534	1,984	1,558	1,522	557	241	1,209	11,811	72,940	△1,071
	50	63,359	998	3,215	1,766	1,453	1,581	479	267	893	10,652	74,011	

（注）△は減を表わす。　1月24日現在

関西大学を志す諸君へ

学長　明石三郎

私は多数の受験生諸君に対し心から歓迎の辞をのべるとともに、最後まで健闘され、目的を達せられるよう心から祈ってやまないものであります。

わが関西大学は創立以来すでに九十年を迎えましたが、その教学の方針としては、一、質実剛健　二、正義　三、自由と自治　四、共同生活　五、知行合一等の諸観念の涵養を基本として参りました。今や本学の卒業生は十五万人を数え、それぞれ社会の各分野で活躍しております。

今日同年代の若人のうち、全国平均で三八%が大学生だといわれます。これら若人が大学に求めるものは、あるいは良き就職、あるいは高い教養、あるいは青春謳歌などだといわれます。これらはそれぞれに意義のあることです。

しかし本来大学教育の目的は、学術の中心として、広く知識を得るとともに深い専門の学芸を教授研究し、知的道徳的および応用的能力を展開せしめることにあります。いいかえれば学問の研究、教育を通じてはば広い人格の形成を目指すものであります。そしてこの目的を達成するため大学には自治が広くみとめられています。これは外部的権力からの干渉を排し、学問研究と教育の自由を保障するために与えられたのでありますが、さらにこれは憲法が保障する学問の自由や良心の自由に根ざすものであります。

将来への理想に燃え
自から求め努力せよ

ところが最近の大学では、極少数ながら、ややもすれば暴力をふるう学生がいると同時に四無主義（無関心、無感動、無気力、無責任）の空気がただよったり、その反動として、レジャーとデルバイトの悪循環に明けくれる学生も目立つのであります。これらは大学の自治をはき違え、「大学の自治」をみずから放棄するものといえます。高校まではいわば上からの手をとり足をとっての教育でありましたが、大学では、みずから求め、みずから学び、みずから掘り下げることが要請される教育であります。したがって高校までのように上から導かれ与えられることのみを求めて大学の門をくぐるならば必ずや失望するでしょう。本学は五百人の専任の教員、二万人を超える学生、八十万冊の蔵書を擁しております。自ら求めて読み語り、一生を左右するほどの重要な意義をもつものといえます。

私は今入試の難関に挑む諸君の雄々しい活力をたたえるとともに難関を乗りこえてなお将来への理想に燃え、みずから求めて努力する若人が多数入学されんことを祈ってやまない次第であります。

学生部短信

昭和五十一年度入学試験は二月一日から六日間にわたって行なわれるが、遠隔地から入学する新入生を受けいれるため、学生部（厚生課・第二学生課）ではいま下宿の開拓と確保に懸命である。

例年、新入生のうち下宿を必要とするものは約千名ていどとみられるが、そのうち八百～九百名が学生部の斡旋で落ちつくことになる予定。今年にはいり、厚生課・第二学生課では連日係員が下宿主を訪ねて状況の把握と空室の確保につとめている。そして二月十二・十三日の入試合格発表日までには新入生の受け入れ態勢が整うことになる。

本学の周辺の下宿の立地条件は他大学に比してかなりよいが、この物価高のなかでは、ある程度の下宿代値上がりは避けられないもよう。学生部でも学生や父兄の経済的負担をなるだけ抑えるため、下宿主との交渉を重ねているが、なかなか難しい面がある。

新しく入学を確定したもので下宿の斡旋を希望する場合は、できるだけ早く学生部へ相談されるように望んでいる。おそくなるにつれて、よい下宿は加速度的に少なくなるうえ、三月中旬を過ぎると希望にかなう下宿を探すことすら難しくなる見とおしだ。下宿を探す場合は本人が必ず学生部に来ることになっているが、契約の問題もあるため、父母兄姉らの同伴が好ましい。

一方、遠隔地の学生を対象とした寮は、男子寮が二寮あり、本年度新入生の募集予定は約百二十名で、通学不可能な地域に居住する新入生から募集されるので、希望者は遅れず申込手続をすること。なお、身障者については、どしどし相談にこられることを望んでいる。新入生に対する下宿の斡旋や入寮生募集については、「入学後の住居について――学生部」を精読されれば詳しくわかるはず。

この新入生の下宿斡旋業務とその開拓、確保のため、在学生に対する下宿斡旋は特別の事情のある場合を除き、四月中旬まで中止されるのでお忘れなく。

千里眼

二月は一年中でも一番寒い。この時期に入学試験と学年末試験が実施される。古来、健康法に「頭寒足熱」という言葉があり、また重大な事態に対処するに「冷頭熱腸」という金言がある。いずれも頭を冷やすことである▼いまの日本の経済は冷え込んでいる。石油危機以来三年越しの不況のまっただ中にある。興人に象徴される大型倒産はいうにおよばず、毎月千件を越える企業倒産が記録されている。失業者は増大するばかりか、操業度の低下から企業はなお百五十万人にのぼる余剰労働力を抱えている。まさに戦後最大の不況である▼不況の過程で生活の価値体系も徐々に変化しつつある。例えば、ある意味で高度成長を支えてきた浪費は、いまや美徳とはいい難くなってきた。さりとて倹約が美徳であるというも、それが生活水準の切下げを美化するものであってはならない。このように消費の意識や態度の中にさえ、思想的な混乱が生じている▼けだし不況は人間の思想にも少なからぬ影響を与えずにはおかない。経済にとって好況は横の拡大であるが、不況は縦の深化を意味する。人間の思想においても縦の深化は重大である。沈思黙考の過程で、広く摂取した知識を体系化し、思想を質的に高めることができる。いたずらに広い知識はものしり屋をつくるにすぎないが、ばらばらの知識が縦の深化を経て体系化されるとき、科学的認識も一段と高まるというものだ▼試験を迎えて自然も社会も寒い季節にある。日頃蓄積した知識は、寒さの効用が存分に発揮されることを求めている。頭が冷えていれば、熟慮が生まれ、適確な判断が湧いてくる。試験は冷徹な理性の勝負である。（S・K）

関西大学の四季

千里の丘に、天六の学舎に二万数千の若人がつどい、勉学、研究、スポーツ、文化活動にと青春の譜を奏で、友情の、自由の、正義のリフレインが高らかに繰り広げられ、時には激しい討究や泥に濡ぺが高まる。四季はまたことあることなくめぐり、若者の情熱が大きな軌跡を描く、失望・悔・失敗をも明日の糧として。青春に栄えあれ！

春

入学式

春休み中は閑散としていたキャンパスも、四かつた様の顔がほこりぶはじめると活気をとりもどす。やがて明るい校歌が響き、フレッシュマンたちが姿をみせる。四月八日、入学式。マンモス校の名に恥じず、二万近い学生が、午前・午後の二回にわけて、二部に分かれて、それぞれ厳粛ながらもにぎやかに、挙式される。喜びの父兄も同伴され、新入生たちは神妙に学長の告辞に耳を傾け、次の修得単位の総単位数を定めることになる。この時よりの、学身の独歩から離脱し、自分で問題を発見し、考え、解決しなければならない。勉学の結果を一歩ふみだす。初心を忘れることなく、頑張ってもらいたいものだ。(H)

新入生セミナー

百人、新緑美しく、新入生諸君のきらきらとした表情がまぶしく感じられるこの頃。前方の分かれ道を左に進むと、図書館に通じている。同時に、それは図書館に通じる道でもある。前方の右に進むと、思い思いの自由に、そこの図書のどこかで四季を味われたいこと。

教室には、君の座るかく窓辺の席掛けと、細長い机の列がある。この部屋は、教授たちとの直接の交流をとおして君の中に眠れ成長する、いきいきした学問の空間になっている。

図書館は、これと同じ交流の空間は作るとも、思い思の自由に選ぶ、専門教育の充実、発展を期している。

ゼミナールは、学生諸人が自らの意思を指導教授と研究テーマに従って、約30名ほどクラスとして、三、四年次の二年間にわたって、専門的研究に取組む。図書館は、「研究論文」をゼミナールの一環として、専門教育目的に設置している。

ゼミナールは、学生諸人が自ら研究室を指導教授と研究テーマに従って、約30名ほどクラスとして、三、四年次の二年間にわたって、専門的研究に取組む。図書館は、「研究論文」をゼミナールの一環として、専門教育目的に設置している。

ゼミナールは、学生諸人が自らの意思を指導教授と研究テーマに従って、約30名ほどクラスとして、三、四年次の二年間にわたって、専門的研究に取組む。図書館は、「研究論文」をゼミナールの一環として、専門教育目的に設置している。

図書館への道

いま春が歩いている道は教育に通じている。同時に、それは図書館に通じる道でもある。前方の分かれ道を左にとると、あるいは、その図書のどこかで四季を味われたい。

教室には、君の座るかく窓辺の席掛けと、細長い机の列がある。この部屋は、教授たちとの直接の交流をとおして君の中に眠れ成長する、いきいきした学問の空間になっている。

図書館は、これと同じ交流の空間は作るとも、思い思の自由に選ぶ、専門教育の充実、発展を期している。

ゼミナールは、学生諸人が自らの意思を指導教授と研究テーマに従って、約30名ほどクラスとして、三、四年次の二年間にわたって、専門的研究に取組む。図書館は、「研究論文」をゼミナールの一環として、専門教育目的に設置している。

ゼミとゼミ大会

大学教育の中心は専門教育にあるが、その中核をなすのがゼミナール（演習）である。図書館は、特に「研究論文」を指導するために、「研究論文」をゼミナールの一環として、専門教育目的に設置している。

ゼミナールは、学生諸人が自らの意思を指導教授と研究テーマに従って、約30名ほどクラスとして、三、四年次の二年間にわたって、専門的研究に取組む。図書館は、「研究論文」をゼミナールの一環として、専門教育目的に設置している。

八十万冊近くあるこの図書館の、人間の知識の集積である、「研究論文」を指導するために、図書館は、特に「研究論文」を指導するために、図書館は、「研究論文」をゼミナールの一環として、専門教育目的に設置している。

八十万冊近くあるこの図書館の、人間の知識の集積である、「研究論文」を指導するために、図書館は、特に「研究論文」を指導するために、図書館は、「研究論文」をゼミナールの一環として、専門教育目的に設置している。

実験室にて

私の研究室（信濃町学科研究室）には、大学院生八名、専門研究室には、大学院生八名、専門研究室には、大学院生八名、専門研究室

社会福祉の動向とコミュニティ・ケア

福祉における連体の必要性

雀部猛利

社会福祉は古くから人間の社会的な生活障害を課題として取扱われてきたが、とりわけその原初的形態としては、3Dと呼ばれてきた窮乏（ディスティテューション）、疾病（ディシーズ）、非行（デリンケンシイ）がその主要な課題であった。しかし今日においては、社会福祉の課題も次第に多様化するとともに、その社会福祉の対象者も特定の社会的弱者だけに止まらず、われわれをも含む多くの一般大衆のほとんどが、その生活において社会的な生活障害を担うようになってきたため、その対象者も大量化してきた。

社会福祉の対象者が特定の限られた少数者のみに限定されていた時代にあっては、彼らをそれぞれの施設に収容保護することによって彼らの担う福祉的な課題に対応してきたが、今日にあってはむしろ地域共同社会に、すなわち彼らをそれぞれの家庭や地域共同社会から切り離さないで、自宅で生活させながら保護してゆくというコミュニティ・ケアの原則が支持されるようになってきた。

一九五九年における「地域共同社会開発と都市地域における社会福祉に関するヨーロッパ・セミナー」に関する国際連合関係者によれば、「コミュニティ・ケア」という概念は、対象者に及ぼす精神的影響と経済的効率という二つの基礎のうえに立つ重要な概念である」とさえ言われている。すなわち「それは障害を受けたわれわれの隣人に対するわれわれの義務を果たす手段を組織的な社会福祉サービスというわく組のなかで提供するものである」から「開かれた地域共同社会での処遇や保護は、かつて多くの対象者が閉ざされた収容施設に閉じ込められて、地域共同社会との接触を絶たれていたのに比較して、より能率的であると同時に人間的である」と言われている。このことは精神薄生、老人や児童保護、身体障害者の処遇についてとりわけ真実であり、彼らを地域共同社会に留めて保護する方が、より人間的な処遇であり、社会的接触の機会を提供しうるばかりでなく、経済効率的にも収容保護よりも効果的であることが強調されている。

わが国においても福祉行政に力を入れている先進都市の自治体では、コミュニティ・ケアという考え方を福祉サービス行政に導入しようとする姿勢が見受けられるようになってきた。地方自治体においてコミュニティ・ケア方式を導入しようとするときには、どうしても次の三つの課題を避けて通ることはできないだろう。すなわち、第一には社会福祉における施設体系をどうするかという福祉システムの問題である。第二には社会福祉行政の位置づけをどうするか行政の果たすべき役割とは何かという行政機能の問題である。第三には住民なりコミュニティなりをどうするかという住民意識やコミュニティ活動の問題である。これらの三つの要素、すなわち施設体系、行政機能、住民意識と活動という三本の柱をどう組み合せてゆくかについて、コミュニティ・ケアが試行されていくのである。そのなかでもとくに福祉施設に関連する問題としては、「技術、人員などの莫大な資源ならびに、もし正当な対価を支払えば、当然すべての地域共同社会の能力の限界を超えるような保護を経済的に動員する手段でもある」と国際連合の社会福祉関係者によって指摘されているごとく、マン・パワーの問題やサービス内容の問題とともに、それに要する費用の問題がかかわりをもってくる。

ところで福祉元年という含蓄薬が交わされてまだ数年も経過していないにもかかわらず、早くも自治体行政においては財政硬直化にともなって、福祉見直し論が話題に上がってきた。いやそれどころか、福祉見直し論に便乗して、それに悪乗りする行政マンさえ現われてきたことは、実に悪しむべき現象である。このような考え方が横行すると、コミュニティ・ケアをややもすれば安価にあがる行政の手段として取り込む危険さえ生じてくる。また世間における福祉見直し論者のなかには、財政が硬直化してきたので、風が通り過ぎるまで、まあ暫らく様子をみて待つという福祉行政に対する消極的姿勢がでてくる危険もある。しかしながら、このような機会にこそ、むしろ真の福祉とは何かという本当の意味での積極的な福祉見直し論が必要ではないだろうか。

高度経済成長は確かに住民の福祉ニードに変化をもたらした。すなわち、福祉ニードの拡大化、多様化、高度化は従来のような社会福祉行政では、充分対応し切れなくなってきただけでなく、住民にとって真の福祉とは何か、それに対応する福祉システムはどうあるべきか、コミュニティとしての福祉とは何かについて、今こそもう一度考え直さなければならない段階にきているのではないだろうか。この問題は行政にとっては確かに扱い難い問題であるかも知れない。これまで福祉六法を中心にして展開してきた福祉行政にとっては、コミュニティという問題はまことにむずかしい視座であに違いない。地域共同社会というものは、そのニードに対応して拡大されてゆくので、従来のような縦割り行政のなかでは、これに対応して行くことができないので、コミュニティ・ケア方式の導入には行政の体質と理念に大きなゆさぶりがかかってくる。また量から質への転換を余儀なくされている福祉サービスのなかに、行政が踏み込めない地域共同社会の運常性や住民参加の問題は、行政にとっても全く経験の少ない新しい福祉需要である。また福祉情報システムが充分確立されていない単線的な福祉サービス行政をどのようにして再編成してゆくか。さらにまたコミュニティに背を向けてきた施設をどのようにしてコミュニティと連帯させていくかなど、数多くの問題を諸君とともに考えてみたいものである。（社会学部教授）

私の映画鑑賞

中山喜代市

外国語を勉強している人にとって洋画はすばらしい学習教材である。私も、学生時代、夏休みにはよく避暑代わりに映画館通いをしたものだ。たとえば「禁じられた遊び」を七回、「逃がなる国から来た男」（ある貧しい姉弟のクリスマスを描いた喜劇で、スパイものではない）という、シャンソン歌手のジルベール・ベコーと私にとってはB・Bより魅力的なフランソワーズ・アルヌールが主演したものを八回ほど見た記録がある。淀川長治氏は「駅馬車」を三十八回も見たということだが、私がベコーの映画を有料で八回も見たのは、実は、その映画のシナリオを秘密ルートで入手、劇化、演出し、大学祭で上演した経験があり、音と演技の猿まね勉強のためだった。

昨年のクリスマスに「ジョーズ」を見た。このような残忍で、残酷で、ショッキングで、ユーモアがあっておもしろく、一寸はかり悪趣味で、それだけに最後がやや拍子抜けの映画が、米国で史上最高の売上げを稼いだとは、入場料の値上がりもさることながら、とにかく不思議な世の中ではある。

誰もが思うことだろうが、この映画の成功のカギはホオジロザメにある。W・ディズニー社が製作したというこの全長八米余、重さ三トンという巨鮫の模型はリモコン装置つきで、海中撮影という利点もあって、日本のどこかの映画会社の怪獣とまったくの大違い、実に迫力があり、リアルな臨場感を観客に与える。

「ジョーズ」はちょうど「白鯨」と「老人と海」の中間に位置づけされ得るような映画であるが、後二作品のような文学的香りはない。つまり、これは典型的な娯楽映画なのである。「中間」というのは怪物のサイズの問題であるからだ。ただ、鮫という動物は鯨等とは異なり「人を食う」ということがこの映画をより特異なものにしている。もしこの「殺人機械」をアル・カポネとしたら、この捕物劇はそのままで三十年代のギャング物となってしまうであろう。釣糸をたれたり、銛を打込んだりして、その方法があまり科学的でない故に、かえって巨鮫の偉大さが高められ、強力な武器を持たない時の人間の無力さが観客をはらはらさせる。クウィントという野卑で残忍そうな鮫とり漁夫が海岸警備隊との連絡を防げるため通信機を破壊する行為は、この男の虚栄と利己性を表現しているだけでなく、鮫との戦いをより原始的なものにし「追う者」を「追われる者」の窮地に陥らせ、サスペンスを盛り上げている。このようにクライマックスへの導入は極めて巧妙であるが、結末がやや不自然で信憑性に欠ける結果になっているのが気にかかる。

とはいえ、「映画ってほんとにおもしろいものですね」といわれるように、どんな映画でも大体おもしろくできているものである。「ジョーズ」もユーモアと恐怖のシーンが巧みに織り合わされた海上大狩猟劇であり、肩のこる？娯楽巨篇であることに間違いなかろう。強いて言えば、この映画は、安閑として一見平和に生きている我々でさえもこの「殺人機械」によって豪傑される何者かによって攻撃され得るという今日的危険性や、市長によって代表され得る商業主義、政治屋的俗物性が良識の声に耳をかさず平和な社会を一時的にせよ危機に瀕せしめるという不安感、また、そのような社会不安を救済するのがアメリカ的ヒューマニズムであるということ等を暗示しているという点で極めてアメリカ色の強い作品であると言えるであろう。（文学部助教授）

映画と外国語と こわーい「ジョーズ」と

新刊紹介

本学名誉教授　正井敬次著
『仏教と汎神論』
（関西大学出版・広報部・一二〇〇円）

さきに正井先生の『人間主義と唯物論と仏教』の紹介をした因縁で、その後続の本書の紹介を引受けざるをえなくなった。正直いって、私には本書を紹介する能力はもとより、理解する力さえもない。したがって僭越の極みであることを断っておきたい。

本書は仏教思想を汎神論という見地から統一的に把握したものである。汎神論の原理は、世界即神・神即世界という命題で表現されるが、右の神を法として、世界即法・法即世界の命題をもつものが仏教的汎神論である。仏教には一般的汎神論と同様に世界創造の神仏すなわちキリスト教的の神が存在しない。では仏教における信仰の対象すなわち帰依の本尊は何かといえば、それは抽象的の法である」（一一六頁）というのが本書の基本的な主張である。先日、ある機縁で近年出版が企てられた『大乗仏典』（中央公論社発行）を手にした。それは主要な仏教の経典を口語訳にしたものである。ページ見したに過ぎないが、『パイブル』のきびしさと対照的に、経典の内容は宇宙の歓喜と賛歌に奏でられている。汎神論というと、いかにもいかめしいが、すべてを抱擁するおおらかな宇宙感をいうのであろう。

正井先生は満九十二歳、ケインズジュームベーターと同年と聞く。本書は前篇よりもいっそうまとまりのある高い水準の学術書である。世に書籍は無数にあろうが、九十二歳にして書かれた学術書は古今東西に例をほとんど見ないのではないだろうか。先生の精神力に対してただ頭の下がるのみ。（山本繁練）

社会学部教授　中井駿二著
『メディアとメッセージ　―マス・コミュニケーションの研究―』
（関西大学出版・広報部・二八〇〇円）

仮りに大勢で旅に出て、緑濃たる海を背景に記念撮影をするとき全員がカメラアイにおさまりきらないと、人はどうするであろうか。たぶん全員がファインダーのフレームに入るまで、後じさりするはずである。同様に未来が頭のファインダーにおさまりきらないときは、過去に立ち戻ればよろしい。

マスコミという現代の巨大な怪物をもてあつかう学問の、混迷がいわれてから久しい。なぜなら著者の言によると「マス・コミュニケーション現象の研究は、その対象が最も現実的でありながら、しかも擬似的であり、定着することなく変転するものであるから、本質把握の困難さがつねにつきまとっている」からである。この著書はその困難さに敢然と立ち向かったまさに勇気ある人の軌跡である。

メディア、メッセージ、情報社会に関する長年にわたる明察が、この著書におさめられている。しかも未来を早見しようとするわれわれ後進の研究者にとって、貴重であるばかりでなく、一般読者にとっても、その筆致は華麗である。（中慶晶三）

文学部助教授　鶴井克之・松野昭二共訳
〈政治経済学基礎知識〉執筆組織
『政治経済学の基礎　―社会主義篇―』
（東方書店・九二〇円）

本書は、中国におけるいわゆる「プロレタリア文化大革命」が社会主義経済学になにをもたらしたか、を知るには格好の書である。

本書では、中国社会主義の現状と毛沢東思想を反映した独得な議論が数多く展開されている。たとえば、「暴力革命＝普遍的法則」論、「プロレタリア階級独裁下での継続革命」論、「社会主義のもとでの二つの階級、二つの道、二つの路線の闘争」論、「自立更生」論、「農業基礎・工業導き手」論、「勤倹建国・刻苦奮闘」論、「政治優先・思想教育第一」論、「ソ連における資本主義の全面的復活」論、「ソ連＝社会帝国主義・官僚独占資本主義」論、「第一・第二・第三世界」論、等々。

評者としては、それらの議論の内容には多くの点で同意できない。また、劉少奇や林彪、および「ソ連修正主義墓切り者集団」にたいする「批判」は、度外れて乱暴であり、説得的ではない。

しかし、やはり一読に値する書である。翻訳はきわめて流麗。また、「訳者あとがき」・「補記」も参考になる。（長砂　實）

▶編集後記◀

本格的な冬将軍が訪れ、厳冬。身も心も引き締め、情熱の炎をかきたてて、せめて精神の温もりを断やさぬようにしたいものである▼本号は、関西大学を目指して、日ごろの学習成果をぶち当てようと押しかけた数万の受験生諸君の健闘を願って、受験生特集号とした。▼大学教育についての本学の基本的な考え方の一端と、受験生への励ましの言葉を寄せていただいた。▼二・三面には、受験生諸君に大学での勉強・生活の一端を知ってもらうため、〝関西大学の四季〟と題して特集をした。できるだけ〝関西大学らしさ〟が出るようにしたつもりだが？▼四面には、雀部教授の現代の社会福祉に関した小論文を得、中山助教授には、いま話題の映画〝ジョーズ〟を紹介していただいた。